



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	大学と附属学校の連携における教員養成の実践研究：大学が主催する交流レクチャーを通して(fulltext)
Author(s)	笠原, 広一; 石井, 壽郎; 西村, 徳行; 水戸野, 寛子; 嶽, 里永子; 守屋, 健; 大根田, 友萌; 神田, 春菜; 大櫃, 重剛; 武田, 渉; 栗田, 勉; 桐山, 卓也; 杉坂, 洋嗣; 柴田, 琢磨
Citation	東京学芸大学附属学校研究紀要, 47: 27-35
Issue Date	2020-07
URL	http://hdl.handle.net/2309/159371
Publisher	東京学芸大学附属学校研究会
Rights	

大学と附属学校の連携における教員養成の実践研究

— 大学が主催する交流レクチャーを通して —

東京学芸大学	笠原 広一
東京学芸大学	石井 壽郎
東京学芸大学	西村 德行
東京学芸大学附属大泉小学校	水戸野 寛子
東京学芸大学附属国際中等教育学校	嶽 里永子
東京学芸大学附属小金井小学校	守屋 健
東京学芸大学附属小金井中学校	大根田 友萌
東京学芸大学附属高等学校	神田 春菜
東京学芸大学附属世田谷小学校	大櫃 重剛
東京学芸大学附属世田谷小学校	武田 渉
東京学芸大学附属世田谷中学校	栗田 勉
東京学芸大学附属竹早小学校	桐山 卓也
東京学芸大学附属竹早中学校	杉坂 洋嗣
東京学芸大学附属特別支援学校	柴田 琢磨

目 次

1. 附属学校と大学の関係と役割	28
2. 附属学校と大学の連携した取り組みの例—ビジュアル・レポート（VR）—	28
3. 教員双方の相互理解をどのように深めていくか	29
4. 附属学校と大学との交流レクチャーについて	29
5. 附属学校と大学との交流レクチャーの取り組み	30
6. 合同研修会の実施	32
7. 交流レクチャーの取り組みをふりかえって	33

東京学芸大学附属学校 研究紀要 第47集

大学と附属学校の連携における教員養成の実践研究

— 大学が主催する交流レクチャーを通して —

東京学芸大学	笠原 広一
東京学芸大学	石井 壽郎
東京学芸大学	西村 德行
東京学芸大学附属大泉小学校	水戸野 寛子
東京学芸大学附属国際中等教育学校	嶽 里永子
東京学芸大学附属小金井小学校	守屋 健
東京学芸大学附属小金井中学校	大根田 友萌
東京学芸大学附属高等学校	神田 春菜
東京学芸大学附属世田谷小学校	大櫃 重剛
東京学芸大学附属世田谷小学校	武田 渉
東京学芸大学附属世田谷中学校	栗田 勉
東京学芸大学附属竹早小学校	桐山 卓也
東京学芸大学附属竹早中学校	杉坂 洋嗣
東京学芸大学附属特別支援学校	柴田 琢磨

1. 附属学校と大学の関係と役割

大学と附属学校の関係は、教育実習での連携はもちろん、実践と理論を往還させながら教育の考え方や方法、様々な課題解決や新たな手法の開発と発信に取り組み、教育界への貢献を果たす重要なパートナーであり教育研究と教員養成の切り離せない両輪である。附属学校と大学が相互の生徒や学生の育成において連携し、新たな実践的・理論的な知の創造において先導的役割を果たすことが教員養成系大学と附属学校に現在求められている。

しかし、そうした協働的な創造や、土台となる関係性の構築は掛け声だけでできるものではない。それぞれが日々教育研究活動を行っている当事者であり、それぞれ異なる固有の目的や仕事もあるなかで、連携して何かに取り組む時間や話し合いの場を設けること自体も容易ではない。しかし、双方が工夫を凝らし、何らかのアクションを生み出したならば、今までにない教育研究の取り組みが生まれるかもしれない。

2. 附属学校と大学の連携した取り組みの例—ビジュアル・レポート（VR）—

本学附属学校と美術科との間には、附属学校研究会を軸に、附属学校教員と大学教員が定期的に集まって話し合いをもち、一緒に活動を企画するという取り組みが重ねられてきた。その成果の一つが、教育実習生の省察をビジュアル・レポート（VR）としてまとめるという、美術ならではの取り組みである。教育実習での大学生の自己省察を言葉だけでなく絵などのビジュアル的な表現も取り入れながら振り返りまとめていくものである。この実習後に作成するビジュアル・レポート（VR）は完成後に大学で展示され、自身の省察の発表であると同時に、次年度以降に教育実習を行う下級生にも参考になる。そして2019年度は大学四年時の教職実践演習での学生の省察にも組み入れた。これまでのように、「教師としての資質・能力」についての振り返りや、「教育を学んだことについて」だけでなく、専門として「美術を学んだことについて」や「自分の学びについて」の三つの視点から四年間を振り返ってビジュアル・レポート（VR）を制作し、卒業制作展期間中に発表・展示を行うことに

した。ちょっとした卒業研究につながるドキュメントやエッセイにもなり、今後の発展も期待できるものとなった。

3. 教員双方の相互理解をどのように深めていくか

これらの取り組みが附属学校教員と大学教員との協働から生まれてきたように、2018年度から双方が授業や講義・演習での取り組みを紹介しあい、互いの考え方や実践を理解し、連携の深化と発展を生み出せるような交流の場を設定することにした。大きくは図工・美術という点で共通したテーマで活動していても、具体的にどのようなテーマをもって日々取り組んでいるのかを互いに知る機会は意外に少ない。教育の世界だけではないが、実践と研究もよく二項対立的に分断したものと捉えられがちである。美術や教育という言葉や最終的な使命は共通しているとしても、それぞれに固有の役割もあり、日々の取り組みには違いもある。また、逆に意外な共通点や接点、相互に大いに参考になる点や刺激になる点もある。まずは双方の取り組みを軸にした対話が開かれる場作りが必要だと考えた。

4. 附属学校と大学との交流レクチャーについて

そこで始まったのが、「図工・美術の授業と教員養成の取り組み」について附属学校教員と大学教員が一緒の場に自分の実践を持ち寄って紹介する「附属学校と大学との交流レクチャー」である。教員同士の交流だけでなく、話を聞きに来る大学生や一般参加者にも開かれた場である。学生にとっては教育実習でお世話になる附属学校の先生の取り組みを知り、普段なかなか聞くことのできない先生の授業の背景にあるものを知ることができる重要な機会である。図工・美術に関わる全ての附属学校教員と大学教員が3年間かけて全員が発表することで、本学で図工・美術に関わる全ての者たちの相互理解が促進され教員間のつながりも強化される。この計画案ができた段階で示されたのは、以下のような目的である。

目的

(1) 美術教育の取り組みについて理解を深める

1) 附属学校と大学の相互の取り組みの紹介を通して

- ・附属学校の授業実践の紹介を通して、図工美術の実践を知り、美術教育の最新現状を知る（考える）機会とする。
- ・大学での教員養成の取り組みの紹介を通して、教師になる学生にどんな力を育てているかを知る（考える）機会とする。

2) 大学と附属双方の教員と学生にとって

- ・上記の取り組みを通して、大学と附属学校双方の取り組みの共通理解を図る。
- ・上記の取り組みを通して、学生の図工美術の授業実践の理解と、教員を目指す中で自分が何を学び考えていけばよいかを理解し、深めていく機会とする。

そして、企画の趣旨は以下のようになっている。

教員養成の取り組みは大学と附属学校との連携による理論と実践の往還、現場からの絶えざるフィードバックの循環によって質的向上が図られます。学校教育に求められる様々な要請の複雑化に伴い、連携の強化による教員養成の高度化と問題解決の取り組みは今後さらに重要になっていきます。今回は本学附属学校での図工・美術の授業実践の取り組みと本学美術科教員による教員養成のための演習の取り組みを紹介します。

相互に情報交流を促進し、今後必要となる図工美術の授業と教員養成の新しいカタチを模索していきます。
(案内文より)

また、この取り組みも含め、教員養成系大学と附属学校に求められているものや、より積極的に模索し、先導的に発信していく必要があるものや、そのための連携や組織的な協働などの構想についても思案した(図1)。

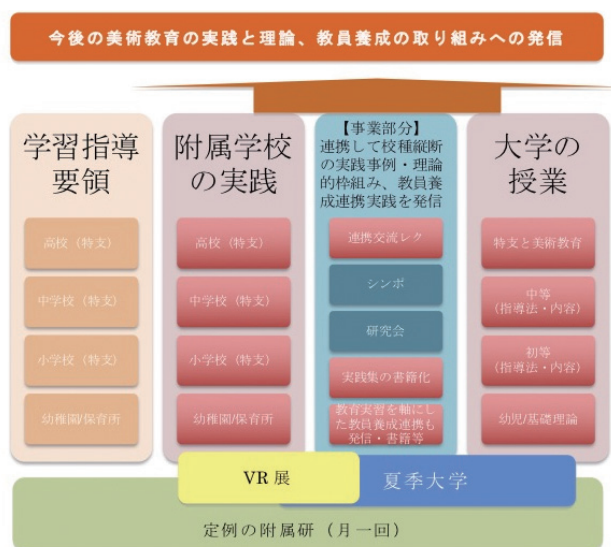


図1 附属学校と大学の連携から見通す今後の取り組み

発表と交流が一巡するころにどのような新たな可能性が生まれるかはまだ未知数だが、双方の取り組みを見ることを楽しみに交流レクチャーがスタートした。

5. 附属学校と大学との交流レクチャーの取り組み

2018年度から2019年末までに五回の交流レクチャーが実施された。プログラムは以下の通りである。

【第1回】2018年5月25日(金) 14:30～16:00(東京学芸大学 W302教室)

はじめに 宮里明人(東京学芸大学 教育学部 教授)

企画説明 石井壽郎(東京学芸大学 教育学部 教授)

実践発表

① 「「ものの見方」について」

速水敬一郎(東京学芸大学 教育学部 教授)

② 「「デザイン」および「教+育」の実践から」

鉄矢悦朗(東京学芸大学 教育学部 教授)

③ 「「一人ひとりの違い」から始まる図画工作」

守屋 建(東京学芸大学 附属小金井小学校 教諭)

④ 「学際的に通用する美術教育をめざして—MYPと「国際教養」そしてDP—」

後藤保紀(東京学芸大学 附属国際中等教育学校 教諭)

全体セッション

速水敬一郎／鉄矢悦朗／守屋 建／後藤保紀／石井壽郎／西村德行／笠原広一

【第2回】2018年10月24日（水）16:10～18:00（東京学芸大学 W201教室）

はじめに 太田朋宏（東京学芸大学教育学部 教授／芸術・スポーツ科学系 学系長）

企画説明 石井壽郎（東京学芸大学教育学部 教授）

実践発表

①「教職の将来について」

宮里明人（東京学芸大学教育学部 教授）

②「統合的な知としての美術」

尾関 幸（東京学芸大学教育学部 教授）

③「対象理解からのアートコミュニケーション」

石井壽郎（東京学芸大学教育学部 教授）

④「楽しく学ぶ図工」

水戸野寛子（東京学芸大学附属大泉小学校 教諭）

⑤「子供の主体的活動について」

桐山卓也（東京学芸大学附属竹早小学校 教諭）

⑥「『思春期の危機』を乗り越えるために」

山田 猛（東京学芸大学附属竹早中学校 教諭）

全体セッション

山田猛／石井壽郎／西村德行／笠原広一

【第3回】2019年1月30日（水）16:10～18:00（東京学芸大学 W201教室）

はじめに 太田朋宏（東京学芸大学教育学部教授／芸術・スポーツ科学系 学系長）

企画説明 石井壽郎（東京学芸大学教育学部教授）

実践発表

①「技法の習得を通じた学びについて—金属工芸の授業と制作から—」

古瀬政弘（東京学芸大学教育学部教授）

②「図工・美術における版表現」

清野泰行（東京学芸大学教育学部教授，附属幼稚園竹早園舎長／竹早小学校校長）

③「図画工作と多文化」

武田 渉（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）

④「アタマとココロが熱くなる図工」

大櫃重剛（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）

⑤「中学校の鑑賞題材について」

栗田 勉（東京学芸大学附属世田谷中学校教諭）

全体セッション

古瀬政弘／清野泰行／武田渉／大櫃重剛／栗田勉／石井壽郎／西村德行／笠原広一

【第4回】2019年6月5日（水）16:10～18:00（東京学芸大学 W301教室）

はじめに 太田朋宏（東京学芸大学教育学部教授／芸術・スポーツ科学系 学系長）

企画説明 石井壽郎（東京学芸大学教育学部教授）

①「授業／理解をめぐる一考察—熟達教員の授業を受けた学生は何に気づいたのか—」

相田隆司（東京学芸大学教育学部教授）

②「授業以外での学生との取り組み」

朝野浩行（東京学芸大学教育学部教授）

③「心豊かな生き方を創造することを目指して～学大附高の工芸教育の取り組み～」

神田春菜（東京学芸大学附属高等学校教諭）

④「IB の視点から個人×文化の美術表現を考えてみる

～タイで出会ったアレコレとともに～」

嶽里永子（東京学芸大学附属国際中等教育学校教諭）

⑤「『生徒が築く美術』を目指したカリキュラムづくりの探究

～“アート”の視野を広げ深めるきっかけづくり～」

大根田友萌（東京学芸大学附属小金井中学校教諭）

全体セッション

相田隆司／朝野浩行／神田春菜／嶽里永子／大根田友萌／石井壽郎／西村徳行／笠原広一

【第5回】2019年10月23日（水）16:10～18:00（東京学芸大学 W301教室）

はじめに 太田朋宏（東京学芸大学教育学部教授／芸術・スポーツ科学系 学系長）

企画説明 石井壽郎（東京学芸大学教育学部教授）

実践発表

①「創作活動を通じたコミュニケーション形成実践研究

—東日本大震災被災地での活動と特別支援学校との連携活動」

花澤洋太（東京学芸大学教育学部准教授）

②「歩くことからアートと教育の可能性をつくり出す

—Mapping A/r/tography Project—」

笠原広一（東京学芸大学教育学部准教授）

③「美術館訪問によるエンパワー

～自分たちの活動をよりパワフルにするために～」

武田渉（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）

④「特別支援学校（知的障害）の図画工作の授業実践

～明日につなげるために何できるか～」

柴田琢磨（東京学芸大学附属特別支援学校小学部主事）

⑤「これからの図画工作科に求められる学びの本質と可能性について」

大櫃重剛（東京学芸大学附属世田谷小学校教諭）

全体セッション

大櫃重剛／武田渉／花澤洋太／石井壽郎／笠原広一

6. 合同研修会の実施

【研修】2019年12月27日（金）12:00～17:00

これまでも附属学校と大学の教員が共同で行う研修会などが行われてきた。今回は大学で取り組まれていた「—Mapping A/r/tography Project—」の実践に関連させた、熱海市内を歩くフィールドワークと、MOA 美術館での学芸員による多色木版の摺体験の研修が行われた。

研修1 「一Mapping A/r/tography Project」実践

このプロジェクトは、「歩く」体験を通して自己省察を深める美術教育の実践であり、今回は熱海市内を歩くフィールドワークを通して、見るもの、出会うもの、体験するものがどのような体験を個々の中に、また参加者の間に引き起こすのか、それが美術教育の実践や研究へとどのように展開していく可能性を持ちうるのかを実践的に考えた。

研修2 MOA 美術館 学芸員の方による研修

MOA 美術館の研修では学芸員による歌川広重の東海道五十三次についてのレクチャーを受けた後、広重の版のレプリカによる多色木版による木版画の摺体験をした（図2）。

- (1) 歌川広重 東海道五十三次の復刻版の解説
- (2) 美術館の鑑賞教育に関わる取り組みについて
- (3) 多色木版の摺体験
- (4) 琳派展見学



図2 多色木版の摺体験の様子

今回のような共同でのフィールドワークや実技研修なども継続していくことで、教員相互の交流はもちろん、共通の体験から何か取り組むべき共通の課題やテーマなどが立ち上がることも今後期待される。交流レクチャーだけでなく、様々なアイデアや取り組みを試みながら、連携した取り組みを深めていけるとよい。

7. 交流レクチャーの取り組みをふりかえって

ここまでの取り組みから、まず回数を重ねてきた交流レクチャーについて振り返りたい。毎回数人の双方の教員にその取り組みを紹介してもらったことで（図3）、本学の附属学校と大学の中で図工・美術に関わるどのような実践や知が蓄積され、日々生み出されつつあるのかが互いに見えてきたことは大きな成果と言える。附属学校教員は研究授業など学校での研究テーマに基づいて、また教員個々の問題関心に基づいてどのような実践や研究を進めているのか、学校ごとにどんな研究課題に取り組んでいるのか、学校毎の課題なども見えてくる。また、大学教員もそれぞれの分野の取り組みの問題関心、それと学生への教員養成の取り組みがどのようにつながっているのか、附属学校や近年の学校教育での図工・美術のあり方に、どのような可能性を付加するような研究や制作であるのか、大学と附属との連携の様々な具体的課題展など、この取り組みを通して確実に相互理解が深まっていった。それは、今まで双方が持っていたものを開示したという点だけでなく、共に現状認識や課題共有を行っていくという作業が行われる場となってもいることの意味も大きい。

各回の発表後には20分程度、発表者と会場の参加者がいくつかのグループに分かれてじっくり話し合う時間をとっている。以下の図4は話し合いの内容を付箋にはってグループ毎に張り出したものである。これによって、附属学校教員、大学教員、大学生・大学院生らが何に関心を持ち、それをどのように受け止めているのかなどが浮き彫りになった。それは今後、それぞれの立場から何に取り組んだり、改善したり、協働していけばよいのかを知ったり考えたりする機会にもなっていた。

まずは双方の取り組みや問題関心を知り、どのような連携協働を求めているのか、学生の教育実習等での育成の取り組みの協働化、双方が一体となって取り組むことで教育現場の新たな課題解決や研究上の課題解決、教育研究上の新しい提案などの挑戦など、今までの大学と附属の連携を超えた、新たな協働のステージを拓くような取り組みができるとすれば、全国の学校での取り組みや教員養成系大学・学部への取り組みにも貢献できる成果が生み出せるのではないだろうか。もちろんそれは、附属学校や大学に通う児童・生徒、大学生や大学院生の成長や学びという成果の土台の上に生まれるものである。



図3 第3回時の発表の様子

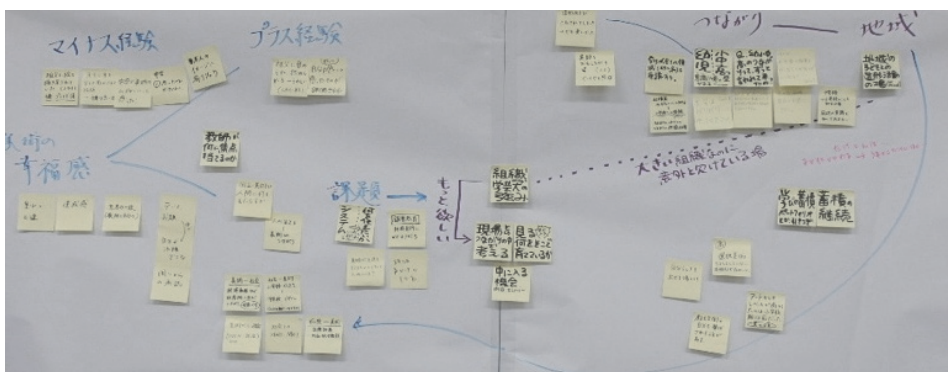


図4 第3回時の発表後の話し合いでまとめられた付箋

しかし、今後こうした交流レクチャーを続けていくことには課題もある。年間の限られた附属学校研究会の回数のうち三回ほどがこのレクチャーにあてているが、毎回全教員が参加できるわけではない。限られた貴重な回数をこの活動に使うことの裏側で、議論できたであろう他の課題への取り組みをどのように進めるかも考えなくてはならない。また、まずは全教員の取り組みを共有する段階であることから、実践発表という形式をとって

るが、課題や内容によっては別の方法や、せっかくのこうした機会であれば、もっと別の活動や方法で交流や議論を持ちたいということもあったかもしれない。課題が山積するなか、こうした活動だけでなく、問題点の解決に向けた全体での話し合いの充実もやはり進めていかなくてはならないだろう。次年度早々に全ての教員の発表が一巡したならば、これまでの取り組みを総括し、次の展開を考えることも今後の課題である。教育研究の課題への取り組みはもちろん、教員相互の交流もこれまで以上に充実したものにしていくことも引き続き大切な点であろう。大学と附属学校、双方の教員、学生・大学院生らのもつ潜在力と可能性をさらに引き出していけるような、そんなアイデアが生まれるような協働のあり方を今後も模索していきたい。